

新学習指導要領における小学校外国語活動、外国語科の授業づくり

皇學館大学 文学部コミュニケーション学科准教授 川村 一代

はじめに

2020年4月からの新小学校学習指導要領全面実施に伴い、小学校3・4年生を対象に「外国語活動」が年間35時間、5・6年生対象に「外国語」が年間70時間実施されます。公立小学校で教科としての外国語（英語）が必修化されるのは、日本の歴史上初めてのことです。2020年度から開始される「外国語」は、2011年度より実施されてきた「外国語活動」と何が違うのか、新学習指導要領では、どういった指導が求められるのか、南立誠小学校の実践と照らし合わせながら、ポイントを確認していきましょう。

1. 外国語活動と外国語の目標

2020年度から全面実施となる新学習指導要領の「外国語活動」の目標の文末は、「～するようにする」と記述されています。2018年度から使用されている文部科学省の中学年用外国語教育教材の題名は『Let's Try!』です。『Let's Try!』という題名からは、「英語によるコミュニケーションを体験してみよう」「英語を聞いたり、話したりしてみよう」というメッセージが読み取れます。「外国語活動」では、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことが培う資質・能力の一つとされています。

一方、「外国語」の目標の文末は、「～できるようにする」と記述されています。2018・2019年度の移行措置期間に使用されていた文部科学省の高学年用教材の題名は『We Can!』でした。教科としての外国語（英語）が学習される高学年では、「英語を使って○○できるようにする」ことが求められます。英語に慣れ親しむだけではなく、目的・場面・状況に応じて、既習語彙や表現を想起し、使えるようになること、つまり「語彙や表現の定着」が求められているのです。

なお、中学年用教材の『Let's Try!』は2020年度以降も使用されますが、高学年では、2020年度からは各自治体で採択された教科書が使用されます。



図1. 外国語活動と外国語の目標の違い

(第15回全国小学校英語教育実践研究大会三重大会研究紀要、2019より)

2. 学習のポイント

「外国語活動」では授業の最初に、学習のポイントとして「Listen carefully, Clear Voice, Eye Contact, Smile」などを意識して活動を行うよう指導してきました。これらのポイントは、英語だけでなく、日本語でコミュニケーションを図るときにも大切な、コミュニケーションの態度に関わるポイントです。教科「外国語」では、コミュニケーションを図る際の態度はもちろんですが、それに加えて、円滑にコミュニケーションを図るための言葉（英語）を使うことが重視されます（図2参照）。

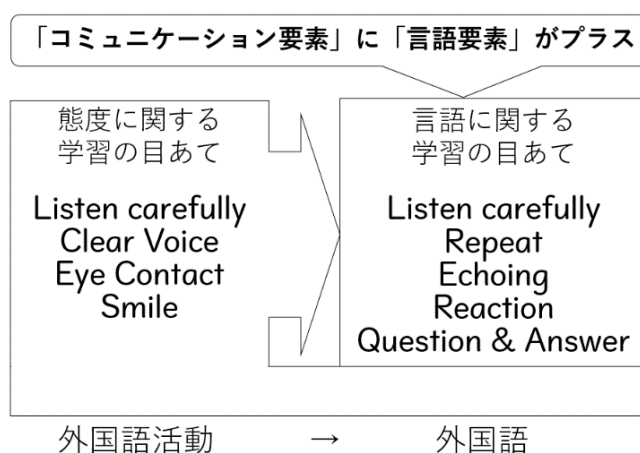


図2. 中学年と高学年の学習のポイント

相手の言ったことをそのまま繰り返す Repeat (A: Dogs are cute. B: Dogs are cute.)、一部を変えて繰り返す Echoing (A: I like dogs. B: You like dogs.)、相手の言ったことに反応する Reaction (A: I like dogs. B: Me, too.)、関連する質問をする Question & Answer (A: I like dogs. B: Do you have a dog?) など、コミュニケーションを円滑にする表現を授業の中で使いながら学びます。南立誠小学校でも、これらの表現が「English 5 Rules (指導案(2)指導について参照)」として毎回の授業で確認されています。「Small Talk ポイント」(p.16)にあるように、Small Talk でやり取りをする際にも、これらの表現を使うよう指導されています。

”Listen carefully”は、「外国語活動」でも「外国語」でも、さらに日本語でも英語でも一番大切なことです。コミュニケーションは相手の話を聞くことから始まります。相手の言ったことに反応することは、相手の言ったことを理解しているかどうかを相手に伝える方法でもあります。Repeat や Reaction は、3・4年生でもできます。中学年の授業でも、Repeat や Reaction を授業で、まず指導者が使い、相手の言ったことを繰り返したり、相手の言ったことに英語で反応したりするよう導きましょう。小学校を卒業するまでに、関連する質問ができるようになり、相手とのやり取りを何往復も楽しめるようになるといいですね。

3. バックワード・デザインの授業づくり

どこかに出かけるとき、まず目的地を定めます。そして、〇時までには目的地にたどり着くには、どのルートをどんな方法で行けばよいか計画を立てます。授業もそれと同じです。まず単元の最後には、児童にどんな姿になってほしいかを具体的に設定します。ゴールが設定されれば、そこにたどり着くため、何時目に何をどんな方法で学ばよいかは自ずと決まってきます。「英語を使って～できるようにする」ためには、最終的にどんなことをできるようにするのかを具体的に定め、そこから遡（さかのぼ）って授業計画を立てるバックワード・デザインによる授業づくり（図3参照）が効果的と考えます。

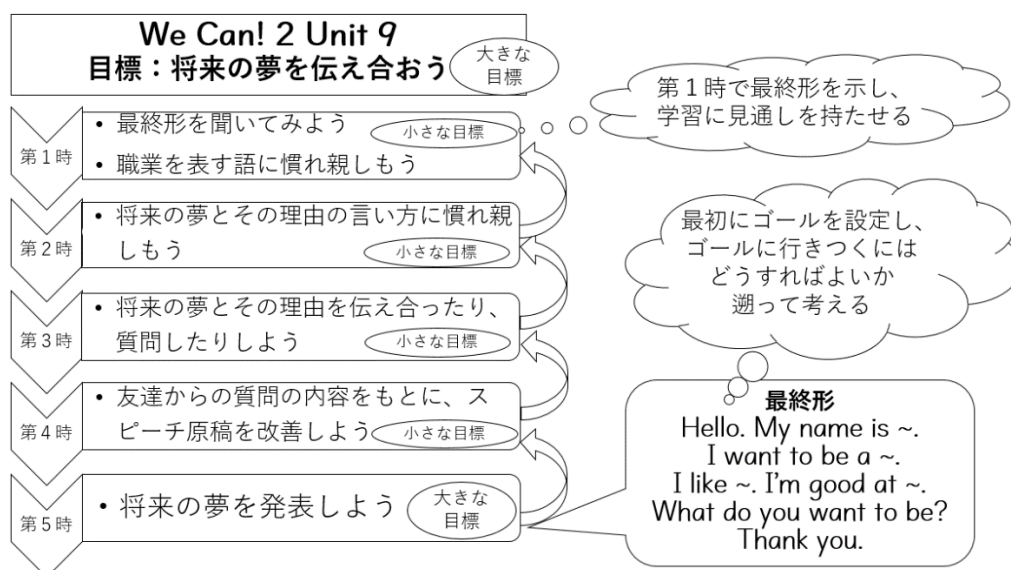


図3. バックワード・デザインの授業構成

南立誠小学校の授業実践では、第1時に指導者が「夢宣言」を実演して、児童に最終形を見せました。そして、この単元では「英語を使って将来の夢を語るができるようにする」のが単元目標（＝大きな目標）であることを明示し、児童と指導者が目標を共有しました。また、ワークシート（p.14）を配布し、単元ゴールにたどり着くまでの毎時間の目標（＝小さな目標）を「単元の流れ」として示しました。ワークシートには、本単元で学ぶ表現や語彙が載っており、本単元の学習内容を見通せるようになっています。語彙は綴りだけが示されていますが、イラストがあるとどんな児童にもわかりやすいでしょう。

目標と評価は表裏一体です。南立誠小学校の授業実践では、評価についてもバックワード・デザインで、児童が発表する前に評価基準（指導案(2)指導について参照）を知らせました。評価基準が具体的に示されると、児童はどこをどう改善させたらよいかのかわかり、主体的に学ぶようになります。しかし、あまりに細かい基準を設定したり、評価を強調したりし過ぎると、児童が委縮してしまいます。児童に評価基準を示すのは、改善や校正の目安や意欲を喚起して主体的学びを促進するためであることを忘れないようにしましょう。

4. Small Talk

小学校英語の教科化に伴い、Small Talk という言語活動が導入されました。『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省、2017）は、Small Talk を高学年で設定される活動であるとし、「2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること」としています。Small Talk では、「既習表現の想起と活用」と「対話を続ける技術の習得」を目指します。

Small Talk は指導者の話を聞くことを中心とした「インプット型 Small Talk」と、児童同士ペアでやり取りを行う「アウトプット型 Small Talk」があります。新出語彙や表現に馴染みのない単元のはじめの段階では「インプット型」を、児童が語彙や表現に慣れてきた単元中盤や単元終了後は「アウトプット型」を行うとよいでしょう。指導者の話を聞くこと中心の「インプット型」であれば、中学年でも十分行えるのではないかと思います。

「インプット型」では、指導者は児童に聞かせたい、そして後に使わせたい語彙や表現を意図的に使って自分の話をします。その際、児童に問いかけるなどして、児童を巻き込みながら話を進めることが大切です。図4は「アウトプット型」の手順の三重バージョンです。

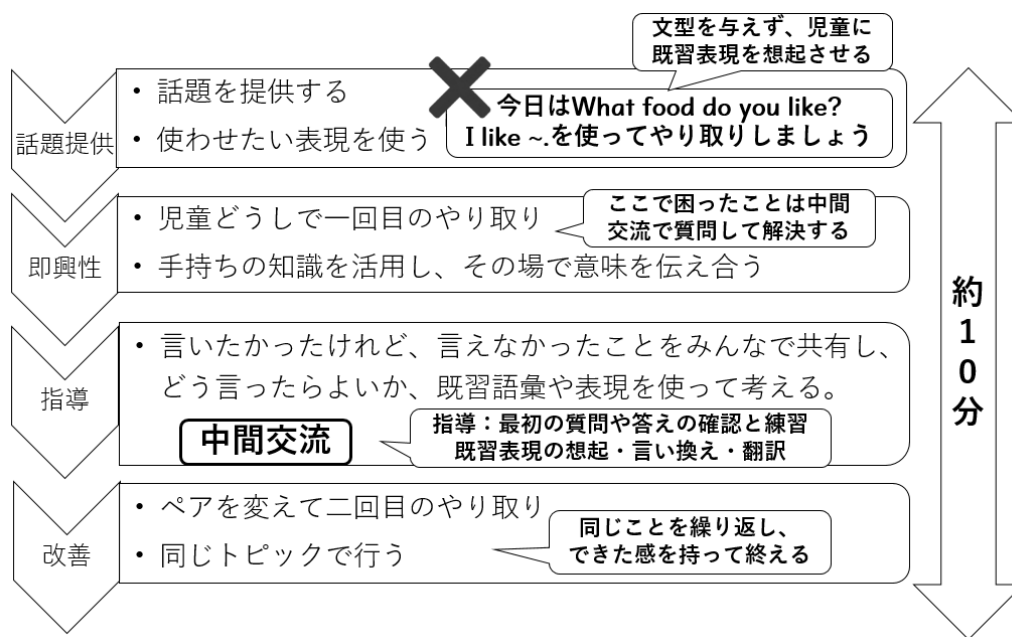


図4. Small Talk の手順（三重バージョン）

まず児童に活動（一回目のやり取り）させ、その後の中間交流で指導が入ります。ここでの指導は英語の言い方がわからない時の対処法です。最初の質問や答え方がわからなかった児童にはこのタイミングで英文を与えましょう。既習表現を思い出して練習したり、工夫を凝らして手持ちの英語で表現してみたり、英語訳を教えてもらったり調べたりします。同じトピックで二回目のやり取りをし、一回目よりできた感を持って活動を終わります。

5. 文字の指導

新学習指導要領においては、3・4年生で「聞くこと」として、大文字・小文字が扱われます（図5参照）。「エイ」という音を聞いて、Aあるいはaという文字を指差すことが求められます。

5・6年生では「読むこと」「書くこと」として文字が扱われます（図5参照）。大文字・小文字が読め、活字体で書けるようになることは必須です。文や語句を書くことについては、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や表現を書き写したり、例文を参考に自分の気持ちや考えに合った語彙を選んで文に当てはめて書いたりします。何もないところに自分で考えた英文を書くのではなく、小学校段階では、音声で十分に慣れ親しんだ文や語句を、お手本を参考に書き写します。南立誠小学校の授業実践では、音声で十分に慣れ親しんだ表現を、毎時間少しずつワークシートに書きためていき、スピーチの原稿としていました。

なお、Aの名前読みは「エイ」で、音読みは「ア」といった、いわゆるフォニックスなどアルファベットの名前読みと音読みは、指導はするが、評価はしないことになっています。

領域	中学年	高学年
聞くこと	文字（大文字・小文字）の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする。	Hi, friends! Plusも活用
読むこと		<ul style="list-style-type: none"> 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。
書くこと		<ul style="list-style-type: none"> 大文字・小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語彙を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

図5. 中学年と高学年の文字の扱い

「外国語活動・外国語の目標」の学校段階別一覧表 5つの領域別の目標（文部科学省、2018）をもとに作成

おわりに

領域である「外国語活動」から「外国語（英語）」という教科になると、上記で見えてきたように変わることがいくつかあります。しかし、英語を学習する目的は、英語を使ってコミュニケーションを図ること、つまり「内容を伝え合うこと」であることには変わりはありません。今まで小学校英語で大切にしてきた、児童が「わかりたい」「伝えたい」という思いを育む授業づくりを続け、児童が英語で伝え合えることが増えていくことを願ってやみません。